

シンポジウム

家族の営む生活の中で家族にとっての訪問看護の役割を考える

小坂 直子（わかば訪問看護センター）

訪問看護の特徴

在宅で患者をかかえる家族が健全な家族機能を発揮して生活するよう支援するのが、訪問看護における家族看護上の課題だと思う。本日のシンポジストそれぞれは、看護の提供の場が違うのだが、場の違いによって、看護の導入の形にも違いがある。訪問看護の場合、対象本人または家族から、何かを求めての依頼があり、導入されるのが特徴である。

訪問看護の対象である在宅療養者とその家族は、看護が提供されるその場で生活そのものを送っている。現在の生活がある形になっているのには、それなりの理由と歴史があってそうなっているのであるから、突然入ってきた看護師にパターン化した看護指導をそのままされても、それが家族に価値づけられない限り変わらない。依頼してもいない内容となればなおさらである。私たちは、そのような方法では問題が解決しないことをすぐに思い知るので、各家族をよく知り家族に合わせた看護を提供するようになっていくのだが、今回はそこに焦点をあて、どのような情報収集や判断に基づいてどう実践を変化させているのか、考えてみたいと思う。

患者本人や家族等と看護師の支援が融和していく過程

訪問看護を依頼してきた対象への訪問看護経過を紹介し、家族全体の生活がより健康的に営まれるようにする上で、看護師はどのように家族を理解し看護の方向性を定めていったか、また、それをどのように表現したのか、さらにそこに必要だったのは、看護師のどんな能力かについて考える。

事例から導かれる、看護師の文化的能力

訪問看護師が依頼されて家庭にはいると、本人と家族の世界が伝わってくる。看護師の認識の中に、過去の事例において困難な状態から「これならやっていける」といえる状態になった家族の像（イメージ）が集積されているので、初めて関わったときにはそれとの比較が生じている。そして、うまくいっているとはいえない状況にあると本人・家族が感じている可能性、つまり、家族の問題の存在を察知する。

だが、まず、何を求めて訪問看護を依頼されたのかをはっきりと認識し、それに応えることである。専門職として、起こっている身体・精神・社会問題とそこからくる生活上の支障を頭の中で構造付け、解決する方法を考える。期待されていることに応えながら、家族と病者の様子を観察する。そのとき、「何々ができていない、足りない」と考えるのではなく、「何ができている、すぐれている」に気付くようにするが、その気づきを助けるのは自身の生活体験や他の事例の経験である。そのようにして集まった情報を元に、対象と家族それぞれの立場に立って状況を考える。そして、それぞれの家族や病者本人のできていること、看護師が感心したことを、機会を捉えて表現する。そこから別の問題に関わっていくことを承認された関係が始まり、始めに依頼された問題が解決しても、家族の問題にも携わるようになっていく。その際、家族関係の構造や生活の中に、看護師がどう位置するか、考えて表現することが必要だと思う。

依頼された問題の裏にある家族生活（人々の価値観を含めて）とその構造を把握すること、そのことに関わっていくことを受け入れられる関係を築くこと（訪問看護が家族にとって価値づけられるように表現すること）、そして、問題解決の方法を家族に合わせて多様に提示できることが、訪問看護における文化的能力ではないかと考える。